

SHOW-HEYシネマール

★★★★

ナイチンゲール

2018年/オーストラリア・カナダ・アメリカ合作映画

配給：トランスフォーマー/136分

2020（令和2）年4月6日鑑賞

シネ・リーブル梅田

Data

監督・脚本：ジェニファー・ケント

出演：アイスリング・フランシオシ

／サム・クラフリン／バイカ

リ・ガナンバル／デイモン・

ヘリマン／ハリ・グリーン

ウッド／ユエン・レスリー／

チャーリー・ショットウェル

／マイケル・シェズビー／ル

ーク・キャロル／サム・スミ

ス

👁️👁️ みどころ

「女の復讐劇」は『キル・ビル』Vol. 1、Vol. 2ばかりではない！「闘うヒロインが世界中をぶった斬る！！」「これが“ナシゴレン・ウェスタン（インドネシア流西部劇）だ！！！」を謳い文句にした『マルリナの明日』（17年）もすごかったが、ヴェネツィア国際映画祭二冠の本作もすごい！女性監督が描く、冒頭のあまりに過激なバイオレンス描写と女性ヒロインが復讐に旅立つ姿に注目！

オーストラリアのタスマニア地方を舞台にした本作では、①イギリス植民地時代のオーストラリア、②アイルランド人女囚と契約奴隷、③ブラック・ウォーとアボリジニ、等の理解が不可欠。それを勉強したうえで、アボリジニの道案内を伴った追跡劇と復讐劇を堪能したい。

ただし、復讐劇本来の本懐の達成は？それに伴う爽快感は？それを考えると、クライマックスに向けての展開に疑問もあるが、そこで見るとヒロインの成長とは？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■「女の復讐劇」あれこれ！近時の傑作は？■□■

「復讐劇」で括れば、例えば、私が小学生の時に読んで衝撃を覚えたアレクサンドル・デュマ・ペール作の『モンテ・クリスト伯』（日本では『巖窟王』の名で有名）をはじめとして、傑作小説、傑作映画はたくさんある。そこで、もっとテーマを絞って、「娘を殺された父親の復讐劇」といえば、法律で禁じられた「自力救済」による追及の異常性が際立っていた『プリズナーズ』（13年）（『シネマ 33』139頁）、「娘をレイプされた父親の復讐劇」といえば、「家族の再生」をもう1つのテーマにした韓国映画『ソウォン／願い』（13年）（『シネマ 33』145頁）がある。また、「ハメられて犯罪者に仕立て上げられた男の復讐劇」の代表作と言えば、パク・チャヌク監督、チェ・ミンシク主演の韓国映画『オールド・ボーイ』（03年）（『シネマ 6』52頁）だ。

他方、「女の復讐劇」といえば、その代表作はクエンティン・タランティーノ監督の『キル・ビル〜KILL BILL Vol.1』(03年)、『シネマ3』131頁)、『キル・ビル〜KILL BILL Vol.2 ザ・ラブ・ストーリー』(04年)、『シネマ4』164頁)。近時は、トルコからドイツへの移民問題やNSU(国家社会主義地下組織)によるテロ事件を絡ませながら、「目には目を！」を徹底させた問題作『女は二度決断する』(17年)、『シネマ42』220頁)がある。また、男たちは皆殺しにされ、女たちは性的奴隷として売買され、少年たちは“小さき獅子たちの学校”と呼ばれるIS戦闘員の養成校へ強制的に入れられる中、女性戦闘員だけで構成された武装部隊である“太陽の女たち”が“自由・平等・博愛”ならぬ“女・命・自由”のために戦う『バハールの涙』(18年)はものすごい問題作だった(『シネマ43』116頁)。さらに、近時の傑作としては、進展著しいインドネシア映画の『マルリナの明日』(17年)に大注目！「闘うヒロインが世界中をぶった斬る!!!」「これが“ナシゴレン・ウェスタン(インドネシア流西部劇)だ!!!」を謳い文句にした同作は、メチャ面白い映画だった(『シネマ45』311頁)。

「女の復讐劇」では冒頭に強姦(レイプ)事件が描かれるのが常(?)だが、概ねそこで「弱い女」か、それとも「強い女」かの本性が見えてくる。しかして、本作では冒頭、兵士たちが集まる酒場の中で、英国軍のホーキンス中尉(サム・クラフリン)に命じられるまま、美しい声でアイルランド民謡を歌うクリア・キャロル(アイスリング・フランシオン)が登場するが、これは一体どこ?また、時代はいつ?そして、美しいドレスを着ているクリアが、ホーキンス中尉の顔をうかがいながら脅えきった表情で歌っているのは一体なぜ?

■本作を理解する大前提(1) 時代は?舞台は?■

本作のチラシには、「あまりにも過激な内容とバイオレンス描写で、ヴェネツィア国際映画祭を揺るがし二冠!鬼オジェニファー・ケントが世界に叩きつける、慟哭のリベンジ・スリラー!!!」の文字が躍っている。オーストラリア人の女性監督であり、本作の脚本も書いたジェニファー・ケントによるオーストラリア・カナダ・アメリカ合作映画である本作は、第9回オーストラリア・アカデミー賞で最多6部門も受賞している。

そんな本作冒頭のシークエンスの舞台はどこ?また、時代はいつ?私には最初それがサッパリわからなかったし、字幕による何の解説もずっとないままだから、結局ラストまでそれがわからないままだった。そこで、本作鑑賞後、疑問点をネットで調べてみると、出てくるわ、出てくるわ。本作を理解するための大前提がいろいろと……。本作を観た多くの日本人は多分私と同じレベルの人が多いと思うので、以下それを解説しておきたい。

第1に、本作の時代はオーストラリアがイギリスの植民地だった19世紀。舞台はタスマニア地方だ。現在はオーストラリアの州の1つとされているタスマニア州は、オーストラリアの南東部から240kmの海上に位置するタスマニア島と、周辺の島嶼からなっている。オーストラリアは、大航海時代を先導したイギリス(大英帝国)によって、1788

年から植民地にされた。当初はイギリス国内で飽和状態になった刑務所からあふれた囚人たちの流刑地として使われた（本作でもそう）が、アメリカの西部開拓史と同じようなオーストラリアの開拓が進む中、オーストラリア産羊毛が大量にイギリスに輸出され、また、1851年以降はアメリカに続くゴールド・ラッシュが始まった。そんな中、現地人だったアボリジニ（本作にもこれが登場）への迫害と、白豪主義が進んでいった。

なるほど、なるほど。そこまで勉強すると、本作冒頭に登場する時代が19世紀で、歌っているクレアはオーストラリアのタスマニア島に送られている女囚であることがわかる。しかし、なぜこの女囚は刑務所に入っていないの？

■□■大前提（2）契約奴隷とは？この男の任務は？任期は？■□■

日本でも死刑に次ぐ極刑（？）として「流刑」が昔からあったが、19世紀のイギリスにおけるオーストラリアのタスマニア地方への流刑はそんな重刑ではなく、単にイギリスの刑務所に収監しきれない囚人たちの収容先としての役割だったらしい。そのため、ひどく貧しい環境下で暮していた人たちが生きていくために犯したパンの窃盗という比較的軽い罪の囚人たちが、タスマニア地方の刑務所に送られていたらしい。そこで興味深いのは、第1にイギリス国内でも差別され貧困層だったアイルランド人の囚人が多かったこと。第2にタスマニア地方に送られた囚人たちは「契約奴隷（年季奉公人）」として使われていたこと、だが、その実態は如何に？そして第3に、そんな状況下、女性受刑者は本作のホーキンス中尉とクレアの関係のように「囲い者」にされることがあったそうだが、それって一体ナニ？

アイルランド西部ゴールウェイ生まれで、今は21歳になっているクレアは、7年間もタスマニア島に追放されている女囚。彼女には今、夫のエイデン（マイケル・シェズビー）がいたし、生まれたばかり赤ん坊のブリギッドもいた。そんな状況下で、クレアが刑期を終えたにもかかわらず、今なおホーキンス中尉の「囲い者」とされているという設定が、本作鑑賞中はもちろん鑑賞後も私にはイマイチよくわからない。それはともかく、そんな“契約奴隷”で“年季奉公人”として“囲い者”にされている“女囚”クレアは、仕方なくホーキンス中尉の命令に従って、キレイなドレスを着て兵士たちの前で歌っているわけだ。ところが、「刑期を終えたのだから早く釈放命令にサインしてもらえ」と焦っているのが夫のエイデン。それは当然だが、ホーキンス中尉を怒らせては元も子もないと心配しているのがクレアだ。本作導入部では、そんな微妙な人間関係と心理上の駆け引きが、ジェニファー・ケント監督の演出によって描かれていくので、それに注目！

他方、イギリス陸軍将校であるホーキンス中尉は、なぜこんな僻地に来ているの？それがホーキンス中尉の希望でないことはストーリー展開を見ているとすぐにわかるが、査察官としてタスマニア島にやって来ているホーキンス中尉より階級が1つ上の大尉の査察をどう切り抜けるの？

■大前提（3）ブラック・ウォーとは？アボリジニとは？■

アメリカでは独立戦争（1775～1783年）と南北戦争（1861年～1865年）が有名だが、西部開拓時代には入植した白人 vs 原住民たるインディアンとの血なまぐさい戦いがあった。それと同じようにオーストラリアでは、1800年代前半にイギリスから入植した白人とタスマニアン・アボリジニとの間に、「ブラック・ウォー」（別名：ブラックライン作戦）と呼ばれている戦いがあった。そして、それに敗北したアボリジニは小島に移住させられ、1876年には最後のタスマニアン・アボリジニは死去したようだ。卓越したアーリア人種によって、薄汚いユダヤ民族を浄化する（死滅させる）ことを狙った、ナチスドイツによる「ユダヤ人浄化作戦」は結局成功しなかったが、タスマニアン・アボリジニの民族浄化を目的としたブラック・ウォーは大成功らしい。もともと、インディアンと同じようにアボリジニも多数の部族から成り立っていたため、すべてのアボリジニが絶滅したわけではなく、「白豪主義」による弾圧下でも細々と生き続け、やっと1967年にはじめてアボリジニの市民権が、1993年には先住権が認められたようだ。

本作後半からは、本作の準主役となるアボリジニの若者ビリー（バイカリ・ガナンバル）が、復讐の旅に出るクレアから雇われた道案内人として登場するが、もちろん、この俳優の映画出演ははじめて。ジェニファー・ケント監督はじめ本作の製作スタッフは、このアボリジニの俳優を探し出すのに相当苦労したらしい。ハリウッドの西部劇ではときどき善良な若手の騎兵隊員が善良で優秀なインディアンと優しく接し、助手として重宝するストーリーが登場するが、本作におけるクレアとビリーとの関係は？それは、後半のお楽しみだが、本作を理解する大前提として、ブラック・ウォーとアボリジニについても、この程度の勉強はしっかりと。

■あまりに過激なバイオレンス描写の是非は？■

査察官の査察の目的は、ホーキンス中尉が駐屯部隊の指揮官として相応しいか否かを判断すること。したがって、ホーキンスとクレアとの良からぬ関係（？）とホーキンス率いる部隊の腐り切った体質を感じ取ったこの査察官がホーキンスに対して、「転勤はさせない。昇進もさせない」と宣言したのは当然だ。しかし、他方で1年の任期を超えて3年間もここに勤務したのだから、次の転勤時には大尉に昇進できる。可愛がられていた上司のベクスリー大佐からそう聞かされていたホーキンスが、これに激怒したのも当然だ。ならば、タスマニア地方の北東端にあるローンセストンに駐屯しているベクスリー大佐に転勤と昇進を直訴するまで。そう決意したホーキンスは、要らざるトラブルの原因を作ったクレアを自宅に呼んだが、これは何のため？

他方、あくまでクレアの釈放をホーキンスに申し出ると主張する夫のエイデンは、ホーキンスの虫の居所がトコトン悪いにもかかわらず、ホーキンスと妻が一緒にいる部屋の中でそれを申し出たが、それに対するホーキンスの反応は？エイデンもうすうす察していたかもしれないが、自分の愛する妻がホーキンスによってたびたび慰み者とされていたと聞

かされ、さらにその時クレアの腕が悦びのあまりホーキンスの背中に回されていたとまで“実況放送”されると、さすがにエイデンが堪忍袋の緒を切ったのも当然。しかして、そこで起きた惨劇とは？

前述したインドネシア映画『マルリナの明日』では、女性監督ならではのそのシークエンスの演出がすごかったが、本作のジェニファー・ケント監督によるそのシークエンスの演出もすごい。ヴェネツィア国際映画祭では、本作への肯定派が優勢だったものの、生々しいレイプシーンや暴力シーンに対して拒絶反応を示す者も少なからず出たらしい。また、シドニー映画祭で本作が上映された時は、30人前後の観客が途中退出したが、その中には映画に対する批判を叫びながら退出した者すらいたようだ。それに対して、ジェニファー・ケント監督は「観客が暴力的なシーンに拒絶反応を示した理由は分かるし、彼らには途中退出する権利もある」と述べた上で、「暴力シーンは植民地時代に先住民族に対して向けられた暴力とレイズムを正確に描写したものである。本作は暴力を描くことを主題にしているわけではなく、暗い時代における愛、同情、優しさの必要性を主題にしている。」
「本作が時代の上っ面をなでただけの作品、ないしは暴力を面白おかしく描写した作品だったなら、観客が拒絶反応を示すことはなかったと思う」と述べているそうだが、さて、あなたのご意見は？

■□■女一人の復讐の旅は？道案内は？■□■

『マルリナの明日』では、「7人の侍」ならぬ「7人の強盗団」から、「あと30分で仲間が来て、お前の金と家畜をいただく。それから、7人全員でお前を抱く。今夜は祭りだな。」と宣言されたヒロインは、本作のヒロインとは全然違うものすごい反撃を見せていた。それは、彼女に「剣ナタ」を使って残忍に男を殺すテクニックと度胸が備わっていたためだ。

そのため、同作は「戦うヒロインが世界中をぶった斬る!!!」と宣伝されていたわけだが、本作のクレアはそれとは違ってただの弱い女。しかし、目の前で夫が殺され、子供まで殺されてしまったクレアは怒りに震えながら固くホーキンスへの復讐を誓い、一人で馬に乗り銃を持ったが、そもそも彼女は銃を使えるの？また、ホーキンスがベクスリー大佐のいるローンセストン駐屯地に向かったことはわかっているが、彼は部下のルース（デイモン・ヘリマン）とジャゴ（ハリー・グリーンウッド）を連れ、また道案内としてアボリジニの男を同行させているはず。クレアもローンセストンへの復讐の旅に出るには、険しい山道を越えながら進むためのアボリジニの道案内が不可欠だが、それをどのように調達するの？

『マルリナの明日』における剣ナタを持ったヒロインの復讐の旅は力強かったが、それに比べると、本作のクレアはいかにも非力。果たして、こんなクレアがホントにホーキンスへの復讐を果たせるのだろうか？

■□■追跡劇あれこれ！肝心な時にアレレ・・・？■□■

『マルリナの明日』では、剣ナタを持ち、馬に跨がって復讐の旅に出るヒロインの勇姿がカッコ良くキマっていた。それと同じように（？）本作でも、銃を持ち、夫が残してくれた唯一の財産である愛馬に跨がったクレアは、旅の始めに1シリング銀貨を渡し、獲物を追跡したらもう1シリング銀貨を渡すと約束して、やっと雇うことができたアボリジニの若者ビリーの先導でホーキンスを追跡する旅に出ることになるが、クレアにはどうしても非力さがつきまとっている。もともと、この旅では随所で見せるビリーの有能さが目立つうえ、当初はアボリジニへの差別意識が顕著だったクレアも、彼の有能さのみならずその人となりを理解していく中で、2人の心の交流が深まっていくので、本作中盤はそれに注目！

他方、ホーキンスもアボリジニの男の道案内でローンセストン駐屯地を目指して進んでいたが、この“ホーキンスご一行様”は途中でさまざまなトラブルに出会ったり、内部分裂が生じたりと連続で、部下の1人は足を撃たれたまま仲間からはぐれてしまうことに。そんな中、やっと追いついてきたクレアはこの傷ついた部下を追い詰め、手厳しい復讐を果たしたが、その姿を見ていると、『マルリナの明日』のヒロインと同じように力強くなっていることがよくわかるから、これなら一安心。ところが、いよいよホーキンスの本隊に追いついたところで、クレアは“待ち伏せ作戦”に臨んだが、せっかく銃の射程距離にホーキンスの姿を捉えたのに、そこで見るクレアの行動は私には全く想定外かつ期待外れ！アレレ、こりゃ一体ナニ？

■□■本作は本当に復讐劇？その爽快さは？クレアの成長は？■□■

日本の最も伝統的な「復讐モノ」である『忠臣蔵』はもちろん、『キル・ビル〜KILL BILL Vol. 1』『キル・ビル〜KILL BILL Vol. 2 ザ・ラブ・ストーリー』でも、『マルリナの明日』でも、復讐劇のクライマックスは立派に本懐を遂げるところにある。そう思いながら本作のクライマックスに注目していたが、それは見事に裏切られ、肩すかしをくらったので、ビックリ。この場所なら、非力なクレアでも、引き金を引きさえすれば、ホーキンスへの復讐を果たせるはず。そう思っていたのに、クレアはなぜそれができなかったの？

本作にみるその後の展開は、私には納得できないものが多い。ホーキンスご一行様は山の頂上で道案内のアボリジニの男を殺してしまったから、その後は山の中をさまよい歩いた挙げ句、野垂れ死に・・・？クレアの方も、ビリーがホーキンスに捕まってしまい、山の中で一人ぼっちになってしまったから、こちらも山中で行き倒れ？そう思っていると、なぜか両者ともにローンセストンに通じる大きな道に出ることができたり、そこを通りかかる馬車に出くわしたり、それまでの厳しい山の中の旅とは全然違う雰囲気になっていくのでアレレ・・・。そして、双方ともローンセストンの町に到着すると、正装に着替えてベクスリー大佐と一緒にテーブルに座るホーキンスの前にクレアは堂々と乗り込んでいっ

たが、そこでクレアは一体ナニを？

このように、本作はなぜか復讐劇のクライマックスとして約束されている展開とは違う方向にどんどん進んでいく。したがって、復讐劇特有の“爽快感”を味わうこともできないことになる。しかして、ジェニファー・ケント監督は、このラストの展開で何を訴えたかったのだろうか？それについては、この展開にみるクレアの成長とともに、観客一人一人がしっかり考えたい。

■□■タイトルの意味は？シェイクスピア文学もしっかり！■□■

『マルリナの明日』は、ヒロインとなる未亡人の名前がマルリナだったから、邦題がピッタリだった。それに対して、本作はヒロインの名前がクレアなのに、なぜ原題が『THE NIGHTINGALE』、邦題も『ナイチンゲール』なの？ナイチンゲールと聞くと、イギリスの看護婦で近代看護教育の母と呼ばれているフローレンス・ナイチンゲールを思い出すが、本作のヒロインは復讐の炎を燃やす女だから、そのイメージとは正反対！その意味でも、なぜ本作のタイトルが『ナイチンゲール』に？

それは、本作冒頭、アイルランド人女囚でありホーキンスの「契約奴隷」とされているクレアが、美しいドレスを着てアイルランド民謡を歌っている（歌わされている）からだ。すなわち、本作の「ナイチンゲール」は看護教育の母として有名な女性の名前ではなく、鳥の名前なのだ。あなたに文学的素養があり、シェイクスピアに詳しく、恋愛モノが大好きなら、ロミオとの甘美な初夜を終えたジュリエットが、昨夜からの甘美な時間の余韻を引きずっていたため、朝の到来を告げるひばりの声を夜鳴き鳥であるナイチンゲールの声に聞き間違えたというエピソードを知っているはずだ。不世出の大歌手「美空ひばり」に象徴される鳥である「ひばり」と、『ロミオとジュリエット』に登場する鳥であるナイチンゲールは明確に区別する必要がある。ジュリエットはそれを間違えたため、彼女はロミオにそのまま留まって欲しいと懇願したわけだ。

他方、『タイタニック』（97年）では、1912年に大型客船タイタニック号に乗ってイギリスのサウサンプトン港から新大陸アメリカに向かったアイルランド人移民ジャックは、船内でローズに激しいリズムのアイルランドの踊りを披露していたが、本作冒頭にクレアが歌うのは、パンフレットに歌詞が載っている美しいアイルランド民謡だ。残念ながら私たち日本人は、その美しい民謡の歌詞がわからないが、ホーキンスから無理やりナイチンゲール（夜鳴きウグイス）されているクレアは、万感の思いを込めて、「愛しい人に鋼の剣を買ってあげたい」「愛する人にまた会いたい」という歌詞を歌っているらしい。なるほど、なるほど。本作を鑑賞するについては、そんな点についてもしっかり勉強し理解しなければ・・・。

2020（令和2）年4月13日記